

北大キャンパス内の続縄文文化の遺跡

本シリーズでは、これまで北海道大学のキャンパス内から発見された擦文文化（およそ7～12世紀）の遺跡や遺物についておもに取り上げ、ご紹介してきましたが、構内には擦文文化よりもさらに地下深くに眠る続縄文文化の遺跡や遺物が発見されています。

*

続縄文文化（およそ紀元前3世紀～紀元後6世紀）とは、本州の弥生・古墳文化に時期的に併行して北海道にひろがっていた文化のことです。本州では農耕が本格的に開始されていた時期に、北海道では縄文文化と同様の狩猟・漁労・採集の生活が営まれていたことから、本州とは異なる独自の文化として「続縄文文化」が設定されました。

北大キャンパス内における代表的な続縄文文化の遺跡としては、縄文文化終末～続縄文文化初頭のキャンプ址であるゲスト・ハウス地点（ファカルティハウス「エンレイソウ」の建設に先立って調査）、続縄文文化前葉の一大集落址である人文・社会科学総合教育研究棟地点、続縄文文化後葉のキャンプ址である学生部体育館地点や創成科学研究棟南地点、続縄文文化終末の墓地が発見されたポプラ並木東地区地点などがあります。

いずれも、当時流れていた河川ぞいの微高地に遺跡は立地していました。約1～2 kmの範囲内にこれだけの続縄文文化の遺跡が密集し、調査されているのは、大変珍しいことです。

*

北大キャンパス内の場合、続縄文文化の遺物や遺構は、地表面から2 mあるいは3 mもの深さから発見されることがあります。これは、沖積地という、河川の洪水が頻繁に繰り返され、

多量の土砂が短期のうちに堆積してしまう地形環境に遺跡があるためです。

続縄文文化の遺物や遺構は、地中深くに遺存しているため、地表面からはその存在がわかりません。北海道大学埋蔵文化財調査室による2～3 mもの深さにおよぶ調査がキャンパス内各地で実施され、実際これだけの数の続縄文文化の遺跡が発見されました。

続縄文文化の遺物や遺構は、地中深くに残されているために、明治以降の各種の工事や農作業からの影響をうけることなく、比較的元来の姿をとどめて残されている可能性も高いのです。また、遺物や遺構だけでなく、当時の地形の変遷を知る手がかりも豊富に残されていると考えられます。北大キャンパスは、続縄文文化の遺跡とその周囲の景観を総合的に復原できる格好のフィールドとなっているのです。



現地表下約2.5mで発見された続縄文文化前葉の
竪穴住居址（K39遺跡人文・社会科学総合教育
研究棟地点）

（埋蔵文化財調査室）